みめぐみの

第6部

みめぐみの

第6部

大谷光道著

目次

本願寺の第二世って どんな人？……2
はじめに……4
親鸞聖人のあと……5
坂東曲……10
大谷聲明研修会……15
読者の頁……21
〈質疑応答〉……21
〈感想・意見〉……27
あとがき……31

本願寺の第二世ってどんな人？

「本願寺」とか「浄土真宗」といえば、親鸞聖人、蓮如上人のお名前は出てくるのですが、親鸞聖人の次の第二世がどんなお方であるとか、「如信（にょしん）上人」の固有名詞も、残念ながらずいぶん知名度は低いと思われます。

親鸞聖人や蓮如上人の偉大さをどれだけ知っていても、「それが〝私〟とどこでどんな風に繋がっていると実感できるのか」、このあたりがはっきりしないと、極端な言い方ですが、宇宙人の教えを「優れた人たちの宗教だから」と、ただただ大事に押し戴いているようなものになります。つまり、「念仏」が絵に描いた餅になってしまっては何もならないということです。阿弥陀様が初めから阿弥陀様であったのではなく、人間であった法蔵菩薩が

成仏して阿弥陀様になられたところに、私たちが近づくことのできる大きな要素があるのと似ています。

こんなことを頭に描きながら、本誌第四部でも少し触れたように、本願寺第二世・如信上人の七百回忌を機に、去る一月二十六日、如信上人（一二三五～一三〇〇）の御旧跡に参拝してまいりました。各地からも、「それなら、ぜひ一緒に」と言ってくださる方が増えて、百人を超える団体となりました。

前日から茨城県大子（だいご）町の近くの袋田（ふくろだ）に泊まり込み、当日は朝から大子町にある如信上人の御廟（ごびょう）（お墓）に、また午後は、そこから五十キロほど南に下がった水戸市郊外の大洗（おおあらい）にある如信上人開基の原始真宗大本山願入寺（がんにゅうじ）にお参りしました。

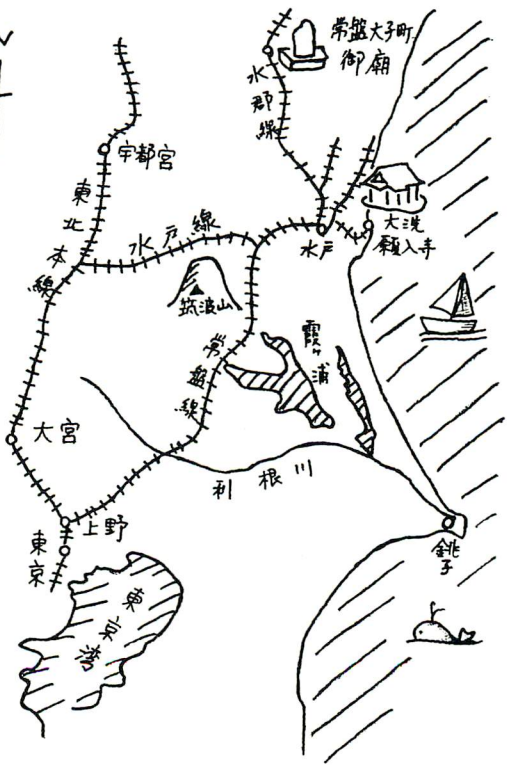
これは、願入寺における私のお礼のご挨拶に加筆して、ご一緒にお参りいただけなかった方々にも読んでいただきやすいようにしたもの――つもり――です。（著者註）

はじめに

今年は、本願寺第二世・如信上人の七百回忌の年に当たります。ご正当は一月四日です。

このたび、当寺の大網管長はじめ皆様方の広いお心によって、如信上人の御前でのお勤め、さらに本願寺の、大谷声明の伝統である坂東曲の勤行をもお許しいただきました。

また、私どもを温かく迎えるため、隅々にまで行き届いた準備をしてくだ



さって、お蔭をもって、ただいま滞りなく勤めさせていただくことが出来ました。本当にありがとうございました。

親鸞聖人のあと

さて、如信上人はご開山・親鸞聖人の孫にあたるお方です。親鸞聖人が関東から京都に帰られてまもなく生まれられ、聖人のおそばで成長されました。親鸞聖人から浄土真宗のみ教えを、聖人のお言葉からだけでなく、その全身から学ばれ、二十歳を過ぎたころまで京都で聖人とご一緒に過ごされました。

その後如信上人は、ここのさらに北の方の、現在の福島県の入口にあたる「大網」というところを中心に教化活動をなさいました。そのため上人のことを「大網の上人」ともいいます。その後大網にできたのが、この「願入寺」であります。願入寺はのちに何度か移転なさって、水戸光圀公の時に黄門様のお力によって今のこの場所に移られた、と伺っております。

それで、如信上人は大網を中心にして活動なさったわけですが、一二六二年（弘長二年）――如信上人が二十七歳のとき――宗祖親鸞聖人がお亡くなりになり、その後毎年京都の大谷まで通われて、京都の報恩講をお勤めになりました。

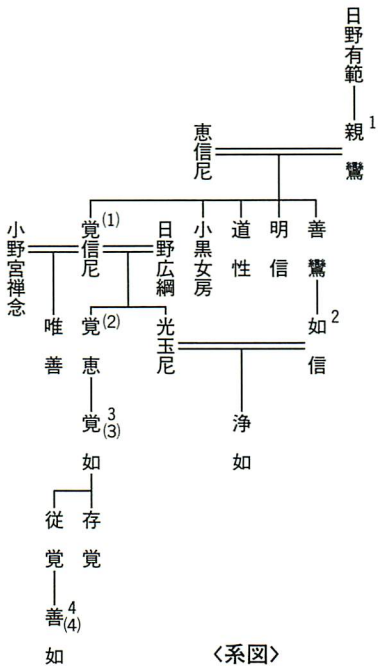
一口に京都までと申しますが、ここから六百キロ。それも一口に六百キロといいますが、当時のことですから歩いてお行きになった。仮に一日五十キロ歩いたとしても、十二日かかります。五十キロもの道のりを連日歩く

大網義明管長（右）と

ということは不可能でしょう。ですから何日かかったことか……。今回、皆様方バス旅行で大変長い時間バスに乗られたわけで、大阪、名古屋、金沢、そのいずれもが十何時間という長旅です。それでも如信上人と比べるには桁が違いますね。

毎年そういうことで京都の大谷まで通われたわけです。大谷というのは、今の知恩院（京都市東山区）のあたりで親鸞聖人の廟堂（お墓と同じ意味を持つお御堂）が建てられたところの地名です。その後これを大谷本願寺と称するようになりました。ですから「大谷」といえば本願寺ないし本願寺の前身を指しているわけです。

如信上人が京都へ通われるについては、日数や体力だけの問題ではすみませんでした。日数がかかるということは、当然費用がかかるということでもあります。それも旅費だけではありません。この願入寺に伝わる鉄の鉢がありますが、当時貧困を窮めた京都の大谷へ運ぶお米を集めるために上人が使

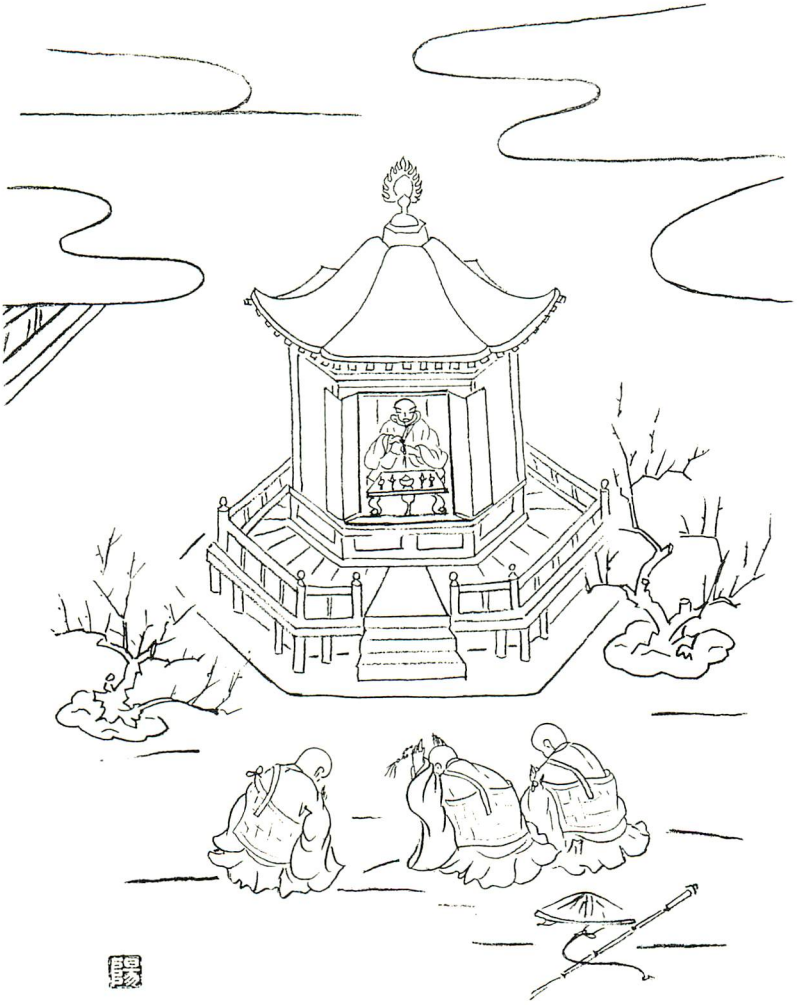


〈系図〉

われた鉄の鉢なのです。

親鸞聖人の末娘で覚信尼という方がおられたのはご存知でしょうか。親鸞聖人亡きあと、関東の聖人の門弟方を中心に、聖人の御廟を建てたいという願いが日に日に強くなっていきました。覚信尼公がその夫である小野宮禅念という方から譲り受けておられた土地を、聖人の廟堂を建てるために提供なさったのが、そもそも大谷の始まりです。

覚信尼公は初代の留守職（廟堂の管理役）になられました。留守職の三代目を継がれた覚如上人（覚信尼公の孫）が、如信上人からみ教えを受け継ぎ教化



初期大谷本願寺に帰参する如信上人一行

に力を注がれたため、大谷の廟堂は寺院化して、つまり宗祖のお墓から宗祖の教えを広める所という性格を持つようになり、「本願寺」となったのです。

覚如上人の著作は内容の深さといい、文章の格調といい、惚れ惚れするもので、報恩講には欠かすことのできない『報恩講私記（式）』をわずか二十五歳で、また同じく報恩講に拝読する『御伝鈔』を二十六歳でお作りになっていることにも感服します。その他重要な著作がたくさんあります。

忙しいことですが、来年は覚如上人の六百五十回忌にあたります。

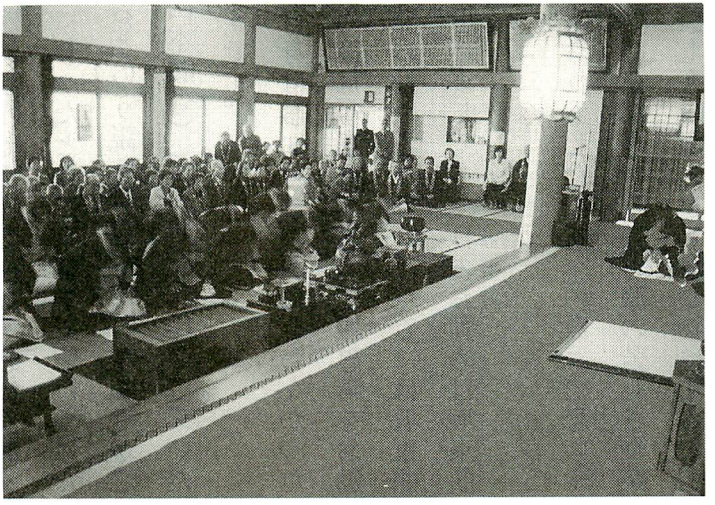
坂東曲

ただいま上半身を前後左右に揺り動かしてお勤めしたのが坂東曲です。

ここで、「お勤め」と言わずに「お経」と言った方がわかりやすいのに、と言われる方があるかも知れません。つまり、「僧侶が仏様の前で声を出すことは何でもお経だ」と決めておられる方が時々おられるからです。しかし、

お経というのはお釈迦様のお説きになった教えそのものを書いたもののこと――仏説何々経――で、例えばご門徒の皆様がいつも唱えておられる親鸞聖人御作の正信偈や和讃は、本来含まれません。お経をはじめ、正信偈や和讃、その他全部を含めて、「お勤め」とか「勤行」と言っているので、そのようにご理解いただきたいと思います。

話を元に戻して、坂東曲というのはその起源について種々の伝えがあります。一、二を挙げるとその第一



坂東曲（願入寺本堂）

は、親鸞聖人が越後へ流されたときに船の上で皆で称えた念仏であるといいます。第二に、聖人がお亡くなりになったときに京都まで駆けつけた関東のお同行（どうぎょう）が号泣した涙の念仏であるという説も有力です。本願寺が二つになってからもしばらくは、お西（西本願寺）でもおやりになっていたのが、江戸時代初期にお止めになったそうです。

親鸞聖人のお葬式には、如信上人ご自身はお知らせが間に合わなかったようで、出ておられません。しかし、その後毎年京都へ通って報恩講をお勤めになったということから、今回願入寺でお勤めさせていただくには坂東曲がもっともふさわしいのではないか、と思いまして、今日のお勤めは坂東曲としたわけです。

幼少の頃、何かにつけ褒められもし叱られもした祖父への数々の思いや、何十日もかけて重い荷物やお供えを担いだ京都までの長い旅の苦しさや楽しさを報恩講にぶつけられたであろう如信上人のお心を、我が物にすることは

とても不可能です。でも、こんなことを頭の中に描きながら、思いっ切り上半身を振り回して、普段味わうことのできないすっきりした気分にさせてもらいました。

私たち浄土真宗の教えを受けている者には、他宗と違って形に見えるような、決められた修行というものがありません。ですから勢い教えというもの、あるいはいただき方というものが理屈だけといいましょうか、頭だけのものになりがちです。

例えば、「念仏」といっても――実際に口に称える念仏こそ念仏なのに――「念仏という言葉」が抽象的に頭の中に居座っているだけではないでしょうか。「南無阿弥陀仏を口に称えること」以外に念仏はありません。

頭の中で「理解」しているだけなのに、自分の信心ができ上がったような気になってしまっているのではないかという不安。だからこそ、なにか物足りない。その物足りなさが、坂東曲のお勤めをすることによって解消しま

す。心の中で称えたり、小声で称えたりとは違った「爽快感」といっては平たすぎますが……。

皆様方はいかがですか。こういう物足りなさを感じられませんか。私たちが物足りなさを感じるとき、坂東曲というのはもっともふさわしいお勤めではないでしょうか。体を動かすことによって、絞り出さなくても声が絞り出されてしまうお勤めです。その声に励まされて、また体が大きく動く。

皆様方今日初めてこのお勤めに触れられた——あるいは見られたと言った方がわかりやすいかもしれませんが——方も大勢おいでになるかと思います。最初まあ一回二回は珍しい……。でも、三回四回となるとだんだん飽きてまいります。もし皆様方飽きておいでになったら、ご自分でおやりになるのがよろしいかと思います。ただし、はじめておやりになるのに思いっ切り頭・体を振っていただくと、首とか、あるいは腰・膝に負担がかかりますので、救急車が来るようなことになってはいけません（笑）。

「坂東曲をやってて救急車で運ばれた」、ちょっとこれは……、私どもが病院から叱られます。「一体何をやらしたんですか。」（笑）ということになっては大変ですので、ぼつぼつとお始めいただくようにお願いします。

大谷聲明研修会

私どものところで「大谷聲（しょう）（声）明研（みょう）修会」というのを毎年、春秋にやっております。今日ここに来てくれて、今私と一緒にお揃いのお袈裟（けさ）で汗をかいてくれた人たちがそうです。

色々なお勤めの稽古、例えばご門徒の皆さん方が毎日お勤めをされる正信偈三淘（みつゆり）のお勤めもそのひとつですし、さらに重い、また軽いお勤めの稽古もします。そしてその中にこの坂東曲も加えてやってまいりました。坂東曲は始めるまでは「難しいのでは……」と、「食わず嫌い」の皆さんでしたが、始めたら「病みつき」になってしまって、毎回少しずつは必ずやることにな

っております。

私は昨年から、「是非とも如信上人の七百回忌に、如信上人の御廟とか願入寺にお参りしたいなあ」と考えておりました。お勤めの稽古の間の雑談の時に、「それでは如信上人の御前で坂東曲をやったらどうでしょうか」、という人がおりました。これはアイディア賞をあげようかなと思っておりましたら、話がだんだんエスカレートしてまいりまして「空っ風の中、御廟で頭に雪を乗せてやったらどうでしょう。いいと思

坂東曲の特訓

いますが……」という風な話になってきまして、「ふんふん」なんて私もそのときは言っておりましたが、後で考えたらぞっとしてまいりました（笑）。

「空っ風の中で頭に雪を乗せて」というのも大変ですが、砂利の上というのがすごいことなんですよ。前後左右に体を揺することを考えてください。膝から脛（すね）がどんなになるか想像してください（笑）。それで、これはもう大変なことだと、初対面の失礼をも顧みず慌（あわ）てて願入寺さんに飛び込みまして、そして、お勤めと同時に坂東曲のお許しをお願いしましたところ、「どうぞどうぞ」と。どうぞ一回じゃなくて、「どうぞどうぞ」といっていただきました（笑）。それで私、救われまして「ありがとうございました」。ここのご住職、管長様ですが私の命の恩人です（大笑）。

でも如信上人のご苦労を思うと、膝や脛が血だらけになっても、六百キロ歩かれた足の肉刺（まめ）に対するご恩報謝にはとどかないですかね（笑）。

それでも今日は殊の外温かくて、御廟はご年配の方はバスの中からのお参

りでないと無理かな、ぐらいのことで考えておりましたが、仏祖のご冥祐と皆様方のご精進とによりまして、大変いいお天気で、温かい中でお勤めさせていただきました。皆様方、大変お疲れさまでございました。

願入寺さん、重ねて御礼申し上げます。ありがとうございました。

このあと、大網願入寺管長がご挨拶いただき、「今日、坂東曲にお参りさせていただいて、関東の門弟方が言葉で表現

如信上人の御廟に参拝

できないぐらい泣き尽くされた姿を目の当たりにさせていただいた思いがする。」とのご感想をいただきました。

「親鸞聖人や蓮如上人の偉大さをどれだけ知っていても、それが〝私〟とどこでどんな風に繋がっていると実感できるのか」、とはじめに皆さんに提示しましたが、これが如信上人の御旧跡にお参りする、私自身の課題でもありました。

如信上人をして六百キロもの長旅を、しかも毎年させたのは何なのか。いうまでもなく阿弥陀様の本願力のなせる業以外の何物でもない、と思います。

如信上人は京都からいうと六百キロも離れた関東の大網を拠点に教化活動をされていたわけで、もし京都へ通われることがなく覚如上人にみ教えが伝わっていなかったとしたら、七百年後の私たちにお念仏が届かなかったことになります。

このようなご歴代のご苦労を一つずつ噛みしめていくことによって――い

や、ご歴代に限りません。皆様方のご先祖方はじめ多くの方々のご苦労を噛みしめることによって――「〝私〟（皆様方お一人おひとり）」にみ教えが届いて来るための幾多のハードルを検証することが、〝私〟にとって大事なことです。『教行信証』や『歎異鈔』、その解説本を読むことも大事でしょう。しかし、それを読むようになった〝私〟の不思議に迫ることが忘れられていては何もなりません。

「既成宗教」という用語が使われるときは、後にあまり快くない言葉が続くことが多いのにうんざりします。しかし、親鸞聖人から八百年、ただ時間が経ったのではありません。八百年の風雪に耐えてきた伝統宗教の重み、味わい……にお互いに自信を持ちたいものです。（著者註）

読者の頁

質疑応答

北海道小樽市　島本邦子さん

質問一

私も三十年前は自分の念仏でございました。いつの間にやら自然にお念仏がこぼれて下さり私の意、口、耳を循環して下さっています。

「みめぐみの」で念仏を称える生活をしていると自然に中身が他力の念仏に変わってくると示されています。うれしくなりました。仏凡一体、凡心がなくなるのでなく、凡心に仏心がひっつく、というところ、わかりやすく、なくならない凡心に閉口している私は明るさをもって生きられそうです。命

終るとき凡心がなくなってそのまま仏に成る……。只今は、罪悪熾盛（しじょう）の凡心に仏心がひっついて下さっている、と有り難くて、元気も出て参りました。

第五部質問四で「死に直面したときどうすればよろしいでしょうか」というところ、お答えがでておりませんが、平生業成（へいぜいごうじょう）とお聞かせ頂いており、おまかせ申すばかりですが、如何でしょうか。

第五部質問六の答で「感じることは出来ると思います、感じることで十分。」というお答え、うれしく頂戴いたしました。　　合掌

答

まず、先回の質問四をもう一度ここに記すと、次の二つの部分に分けられます。

① 死に直面した時どうすればよろしいのでしょうか。

② 奔放な生活をしている人が仕合せであって一生懸命な生活をしている者に却ってそれが裏目に出て不仕合せが多いということがあります。それが納得できません。お念仏を称えて居ればそれで救われるということでしょうか？

私は、このご質問全体を読んで、まっ先に答を求められているのは②の方であるということと、②が解決すれば①もやがて解決すると思いました。それに①については「念仏」という答しかないことも、質問の主はわかっておられるのが読み取れます。それで、①については今は何も書かない方が混乱しないと考えたものです。答がないからといって、心配しないでください。

富山県の匿名希望の方（本誌意見感想欄）もだいたい同様なご意見ですが、この質問に対するあなたのご意見（平生業成、おまかせ）は、まことに結構です。そして、あなたのご意見の最後に「如何でしょうか。」と付いていますが、このような遠慮は不要です。「……おまかせ申すばかりです。」と、堂々と断定してください。

質問二　○行間があいていてよみやすい

静岡県島田市　杉山富子さん

○もう少しかみくだいて表現してほしい
○まんがをのせる　わかりやすいはずです
○仏だんのかざり方をのせてほしい
○おふせのことをのせてほしい

大変失礼ですが、ひょっとするとご要望の趣旨は「僧侶にお勤めをしてもらったときのお礼の〝定価〟を知りたい。」ということでしょうか。お布施は、お勤めの内容や地方の習慣によっても大きな違いがあるのが実状で、何よりも出される方のお気持ちによって決まるものです。

今回は、ご質問の趣旨とは異なるかもしれませんが「布施」の原点についてお答え頂きました。

（編集部）

答

「布施」の本来の意味は、「施しをすること」で、財施（金品を与えること）、法施（教えを説くこと）、無畏施（怖れない心を与えること）の三種が

あります。そしてこの布施は、菩薩が行うべき六波羅蜜（ろくはらみつ）――梵語「パーラミター（pāramitā）」の音写――の修行の第一番目にあたります。他の五つは、持戒（じかい）（戒律を守ること）、忍辱（にんにく）（侮辱や苦しみに耐えること）、精進（修行に励むこと）、禅定（ぜんじょう）（精神を統一すること）、智慧（正しく認識し判断すること）です。

私たちは、「人に金品を与えること」とだけ言えば、もちろん日常的にやっているわけで、特にどうということはありません。しかし、布施の行というのは、「いつ、だれに、何（またはいくらのお金）をあげたのか、に全くこだわらないようにする修行」なのです。

人と仲よくやっているときは、いつもよくしてくれるからと思って、気前よく物やお金をあげるのに、調子が悪くなると「あいつはこの間、一万円もやったのに……」と、「のに」がつくようになります。執着（しゅうぢゃく）を離れる修行が大事なのは当然ですが、「のに」の気持ちの出てこない生活なんて、考えただけでも「まことにすばらしい」の一言です。しかし、要はこれが実践できるかどうかということ

が問題です。いつもお話するように、浄土真宗は凡夫のための宗教です。この「及び難い」修行をどう考えたらいいのでしょうか。

自分自身の努力ではこの布施の行ができなくても、お念仏の信心のご利益（りやく）をいただくことはできます。例えば、お念仏ひとことで心がすっきりして、物に対する執着のためにどうしようもなくなって頭を抱えていた自分を見いだし、まるで霧が晴れて急に視界が開けたときのようにずっと遠くまで見渡せるようになるものです。つまらない私の欲望から解放され堂々と胸を張っていける道が示されるという経験を、皆様もお持ちでしょう。念仏は私の行ではなく、如来の行であるといわれるゆえんです。

お布施のご質問をいただき、本来知りたいと思われたこととあるいは隔たりがあったかも知れません。しかし、私のこの話もお役立てください。

感想意見

愛知県常滑市　都築捨子さん

みめぐみのの御本第一部、二部、三部、四部と部を重ねるごとに次の五部の発刊が待ち遠しいこの頃になりました。正直言って、第一部は優しく分かり易く皆様に親しく読んでもらえるように書いてありますからとお聞き致しました。でも読んでも中々理解出来ず、くやしくて、でも何度も何度も繰返し読ませて頂きました。今回第四部におきましてはすーっと中に入らして頂くことが出来、蓮如上人、第二十五世御門跡様の見えない部分が私達のお同行と同じような日日の御様子をかい間見る文面に尊敬と恐れ多いけど親しみ易さを覚えて笑をたたえて読ま

せてもらいました。最後の読者の頁ではすばらしいお歌にお目にかかり感動致して居ります。声を出して南無阿弥陀仏

（『第四部』で寄せられた感想）

富山県　匿名希望

「私は定善や散善は全くやってみたことありません。」と申されました。有難度いお言葉で御座います。定善散善は心も及ばぬ私です。欲望のままに生長しました。しかし地獄が恐くなり「おたすけ下さい」と阿弥陀様におすがり致しました。しかし阿弥陀様と云へども仏様である。悪人を救ふて下さる事はなかろうと思ってゐましたが蓮如さま御文、歎異抄により悪人を救ふのが阿弥陀様だ。そのままで成仏させらるるのが南無阿弥陀仏の御信心だと聴かされてよろこび居ります。極楽浄土と云はれましても私には分りません。阿弥陀様におまかせしております。そんな私ですから私の好きな御文さまは一帖目七通目「サンヌル文明第四ノ暦……」歎異抄「他力をたのみたてまつる悪人もっとも往生の正因なり」の

御文で御座います。無宿善の人には見せてはならない歎異抄ですから感想意見質疑応答採用不採用はおまかせ致します。

このお便りの最後の部分は、『歎異鈔（抄）』の末尾にある蓮如上人の奥書（由緒書）

右この聖教は、当流大事の聖教となすなり。無宿善の機においては、左右なく、これを許すべからざるものなり。　釈蓮如（花押）

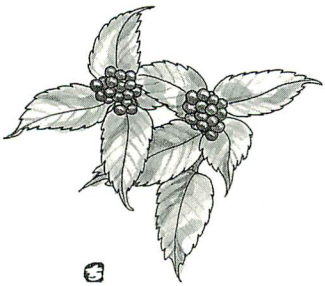
を心配されている模様です。ひところは、浄土真宗関係の本といえば『歎異鈔』といえるほど流行りましたが、特定の状況のもとで特定の問題に対して書かれた著作なので、これだけを読んで「浄土真宗がわかった」というのはたいへん危険です。蓮如上人の奥書を頭においてお読みください。

（著者註）

愛知県常滑市　中山幸枝さん

世の為、人の為、引いては自分の為になることを信じて毎日を過ごして参りました。私にとって、第五部の『みめぐみの』を読ませていただき、十五頁の「どうすればいいのか。」を開いた時阿弥陀様の本願に惚れるという言葉があり、私は其の言葉にすっかり惚れてしまいました。

今後も是非此のような教へを御願致します。御期待申し上げます。



あとがき

みめぐみの刊行委員会

今回は、如信上人七百回忌にあたってのご旧跡参拝をテーマとしていただきました。

御門跡光道台下と一緒に参拝に加わった私どもは口々に「参加して本当に良かった」と喜び合い、声明研修を受けたわけでもなく坂東曲に触れるのが初めての人たちも「ひとりでに体が動き出した」とか、「こんな涙は初めてだ」など、無形のおみやげを持ち帰りました。

読者のページにて質疑応答欄を設けましたところ、多くの方々より多伎に亘ってご意見、ご質問をいただき有難うございます。掲載を決定しても紙面の都合で次部へ送らなければならないこともあり、ご容赦下さい。

第五部では掲載分のお礼として光道台下よりご染筆の色紙を贈呈していただき、皆さんたいへん喜んでくださっております。今後とも別紙(折込みハガキ、切手不要)にてどしどし、ご意見、ご感想、ご質問をお寄せくださるようお待ちしております。

みめぐみの　第6部

1999年3月5日　印刷
1999年3月10日　発行

定価 200円

著　者　大谷光道

発　行　みめぐみの刊行委員会
〒600-8167 京都市下京区烏丸通七条上ル常葉町754
本願寺寺務所内
TEL. 075(351)3555　FAX. 075(351)3120
振替口座　01060-5-56990

印　刷　㈱中外日報社

みめぐみの刊行委員会刊